

創立80周年をふりかえって

同窓会長 高垣 雄二郎

甲陽だより

発行所
西宮市角石町3-138
甲陽学院同窓会
電話 西宮(078)71-4553番(代表)
郵便番号 662-0096
編集人 高垣雄二郎
印刷所
株式会社 六甲出版
神戸市灘区岩屋北町3丁目3番18号
電話 神戸(078)871-1234号

同窓会専用電話
0798-71-4888
月・水・金曜のみ
(同窓会に御用の方はこの電話を御利用下さい)

昨年、母校甲陽学院創立八十周年記念会員総会が、多くの同窓諸氏にとつては、懐かしい甲子園、今その跡地に建つ甲子園都ホテルの大会場―その名も縁の「甲陽の間」において、盛大に開催できましたことは、感謝にたえません。

今回の総会開催並びに会員名簿発行に際し、並々ならぬご尽力とご協力賜りました皆様には厚く御礼申し上げます。

かえりみまするに、大正六年即ち一九一七年わが国にも漸く自由の風がふきはじめた頃、伊賀駒吉郎先生は、その新風を学園にとりいれられ、自然環境に恵まれた理想郷(今の甲子園)に、「甲陽十二訓」を教育の理念として「甲陽中学校」を創立されました。

つづいて日頃、育英事業に深い関心を寄せられている辰馬吉左衛門翁の篤志により、私財を投じて「財団法人辰馬学院甲陽中学校」を設立し、又今次阪神大震災による被災に際しても、大いなるご配

慮に与つた事に対し、皆様とともに満腔の謝意を表したいと存じます。

この理想的な教育環境のもと、自由が生んだ比類なき「甲陽精神」を体得した生徒達は、愛校心に燃え、開校六年目の一九二三年に野球部は、全国中等学校野球大会において全国制覇という快挙を成し遂げ、それに続く部活も大いに成果を挙げ、一躍「甲陽」の名は天下に轟きわたりましたことは、皆様ご承知のとおりです。併せて英才を輩出し、国の内外において、社会に貢献している姿を見ると、まことに喜ばしき限りです。

今年度は、第七十九期の新卒業生を迎え入れることになり、高商・工専を含めて同窓生は総数一万五千名を越えるに至りました。力強き限りです。

最後になりましたが長年に互り、母校の校長として、尽力されたい今は亡き小河清麿先生のご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)

母校の創立八十周年を記念する同窓会会員総会が昨年九月二十八日(日)、母校跡地に建つ甲子園都ホテルにて開催され、四百人余りの参加を得ました。

氏は(45回)、北橋健治氏(52回)、西和彦氏(55回)がパネリストを務められました。花房教授の講演要旨を第三面に、シンポジウムの様子を第二・三面に掲載しました。

総会は、甲陽学院高校アンサンブル部によるファンファーレによって幕を開け、三部構成で進行しました。

第一部は、「鳴尾の間」を会場とし、物故者へ黙祷を捧げた後、高垣会長による式辞、学校法人の辰馬伸彦理事長、母校の中村泰三校長によるご祝辞をいただきました。中村校長のご祝辞は第二面に掲載しました。

第二部も引き続き「鳴尾の間」にて、第二十八回生で文化勲章受章者の花房秀三郎・米田ロックフェラー大学教授より「三十五年の海外における研究生活から」と題した講演をいただき、その後「われわれを育てた懐かしい甲陽の原風景と二十一世紀の人間づくりに果たす役割を語る」と題するシンポジウムが行われました。シンポジウムは、河内厚郎氏(52回)の進行で、高口恭行氏(40回)、西村貞一

第三部は、会場を「甲陽の間」に移し、盛大な祝宴が催されました。辰馬本家酒造よりご寄贈いただいた四斗樽二本の鏡開きに引き続き、辰馬章夫社長にご挨拶と乾杯のご発声をいただき、祝宴が始まりました。会場には、陶芸家田中和人氏(45回)作の「大壺」、作詞者・竹中郁先生自筆の「甲陽学院のうた」が飾られ、また田中和人氏作のぐい呑みやウイスキー、会員名簿などが寄贈いただいた豪華景品が当たる福引を行ったり、「校歌」「学院歌」の合唱、「フレージャー甲陽!」のエルなどで大いに盛り上がりました。

第三部祝宴の様子は第四面に掲載しました。

午後一時より始まった八十周年記念会員総会は午後五時に成功のうちに終了いたしました。

第三部祝宴の様子は第四面に掲載しました。

午後一時より始まった八十周年記念会員総会は午後五時に成功のうちに終了いたしました。

第三部祝宴の様子は第四面に掲載しました。

第一部 学校長祝辞より

甲陽学院高等学校中学校校長
中村 泰 三

秋も深まりつつある佳き日、本学院創立八十周年記念同窓会にお招き頂きまして、厚くお礼申し上げます。

ご存じのように、一九二〇年辰馬学院が創設された時の趣意書の中に、「世の中の秀才を教育して、各人の才能を発揮させて、見事な人物を出現させるのは、ただ国家百年の大きな計画だけでなく人生の喜びとして、これに優るものはないであろう。人を育てるといふ事は、国家の将来のためだけでなく、大きな喜びである」と辰馬家第十三代当主辰馬吉左衛門氏は述べておられます。

ゆとり教育、心の教育といわれている現在、それらの教育の基本は、環境整備であると思っております。この考え方に關して辰馬育

ます。数多い私立学校の中でこのようにすべてに恵まれていることに感謝しております。

輝かしい伝統があつても、それを今日の流れに活かさなければ、単なる年輪でしかありません。八十周年というこの節目に、創立の精神を今一度かみしめ、更に不動のものにしたいと願っております。

昨日は学校でも花房先生にご講演をいただき、教多くの同窓生のご尽力で、学院の八十周年記念事業計画も順調に進んでおります。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

創立の心を振り返り、ともに手をとって、時代がどのように変化しても、「百年の計」として、自由精神とそれを支える規律ある自主性の育成に、前向きに進んでいきたいと思つています。

最後になりましたが、八十周年同窓会総会に当たり、高垣会長はじめ役員の皆様、長期間のご尽力、ご苦勞に對して、心からお礼を申し上げ、祝辞と致します。

第二部 シンポジウム要旨

われわれを育んだ懐かしい甲陽の原風景と21世紀の人間づくりに果たす役割を語る

司会・文芸評論家

河内 厚郎 (52回)

一心寺住職

高口 恭行 (40回)

甲陽時代のエピソードとしては、高校三年の時によく学校を脱出していたこと

です。昼休みになれば、下宿と学校の間にあるうどん屋でソバを仕入れて、下宿で食べていました。そういうことが見逃されていたというのが、今日、仏教徒になつたり建築を続けたりということにつながつたよう

です。あの頃の僕にとつてとてもいい学校でした。京都大学に進んでからの方が退屈で、うろろる遊んでいるうちに仏教書なども読むようになり、僕が「変わった人」と呼ばれる原因をつくつたのは甲陽でしょう。

印象深い先生は多くおられます。中学入学から高校卒業まで小河清麿先生が担

を過ごしました。教卓にチークを塗って先生の服を汚したり、村上千秋先生の墓を作って怒られたり、意外に楽しい日々でした。

二十一世紀の甲陽に期待するのは、一つには、幅のある、ゆとりのある教育、もう一つには、思考力を鍛えること。特に、論理をきちんと構成できる力、原理を見極めていく能力があれば、世の中の変化にも対応していける人になれると思

います。また、英語はしっかりと勉強して、しゃべれなくても読み書きができるようになった方がいいでしょう。とくにビジネスでは契約書などがありますからとても大切です。

衆議院議員

北橋 健治 (52回)

私が高校二年生の時、甲陽にも学園紛争の嵐が吹き荒れてきました。全共闘運動への誘いも受けたのですが、話を聞いているうちに逆の方向へ行き、生徒会長選挙に立候補し当選しました。あれが私の最初の選挙です。会長として、空前の速さで予算編成をまとめたことが自分の誇らしい実績

甲陽だより

第二部 記念講演 要旨

35年の海外における

研究生活から

ロックフェラー大学教授

花房秀二郎 (28回)

私は小さいときから理科が好きだったので、旧制高校進学にあたっては、迷わず理科を選びました。大学は、甲陽の永井勇一先生の

順調に進み、当面はアメリカで腰をすえて研究したいと思っているうちに三十六年が過ぎてしまいました。

助言で阪大の理学部の化学に進みました。当時の阪大理学部は、教授陣も充実しており、学生も大いに議論をしあう土壌があり、そこで論理的な考え方を養うことができたと思います。

化学出身者が癌の研究をするのは日本では非常に珍しいことですが、アメリカではほとんど行われており、日本の学問の世界のフレキシビリティのなさを痛感しました。

私は、ウイルスが正常な細胞を癌細胞に変えるメカニズムを研究しようと思いましたが、藤棚の下をさわやかな風が吹き抜ける素晴らしい運動場や、甲子園球場の周りを駆け足したことが、教室の中でいたずらをしたことなど、懐かしい思い出があります。そして、たくさん

阪大では、タンパク質のアミノ酸組成、アミノ酸配列などを研究していましたが、後にウイルスの研究を始め、癌を起こすウイルスが存在することを知って、昭和三十六年より渡米して研究をしました。当時の日米の科学の格差は大変大きかったです。また、世界の一流研究者の中で自分を試してみたい気持ちもありました。幸い私の研究は

過程をどのようにコントロールするか、そのアプローチがあるか、が研究の焦点になっていきます。

私が甲陽に入学したのは大戦中の昭和十八年で、途中一年四ヶ月ほど陸軍幼年学校に籍を置きましたし、四年生で修了して浪速高等学校に進みましたから、甲陽にいた期間は長くはありません。それでも、わが青春といえは甲陽抜きには考えられません。

甲陽に入学した時にまず感心したのは、建物が立派だったこと。入学式で在校生が腹を揺るがすような太い声で校歌を歌ったことなど、新しい世界に入った感動をおぼえました。戦争中のことですから、教練で教官に殴られたことなど、必ずしもすべてが楽しい生活だったわけではありません

私が甲陽に入学したのは大戦中の昭和十八年で、途中一年四ヶ月ほど陸軍幼年学校に籍を置きましたし、四年生で修了して浪速高等学校に進みましたから、甲陽にいた期間は長くはありません。それでも、わが青春といえは甲陽抜きには考えられません。

私は小さいときから理科が好きだったので、旧制高校進学にあたっては、迷わず理科を選びました。大学は、甲陽の永井勇一先生の助言で阪大の理学部の化学に進みました。当時の阪大理学部は、教授陣も充実しており、学生も大いに議論をしあう土壌があり、そこで論理的な考え方を養うことができたと思います。

私は、ウイルスが正常な細胞を癌細胞に変えるメカニズムを研究しようと思いましたが、藤棚の下をさわやかな風が吹き抜ける素晴らしい運動場や、甲子園球場の周りを駆け足したことが、教室の中でいたずらをしたことなど、懐かしい思い出があります。そして、たくさん

正常な細胞が癌細胞になるメカニズムが証明できました。現在では、癌の起こる

です。もともと、その後起こった服装自由化運動に対しては、規律励行運動を展開したので、当局側と見なされて吊し上げにあたりました。学生時代にいろいろと思想遍歴をしましたが、そういう学園紛争の経験がこの道に入った動機です。

甲陽の先生方にはよくスポーツを奨励していただきましたが、二十一世紀のリーダーはまず体力です。一番大切なときの根気は体力からです。文武両道の教育を期待します。さらに、英会話やコンピュータ教育などに力を入れて下さい。

政治家を志す先輩はご一報ください。まずはやめるように説得します。それでも天下国家地域のためにという方には、必勝の極意を教えて差し上げます。

アスキー社長 西 和彦(55回)

僕は高校から甲陽に入学しましたが、高校の早い時期に人生を決定づけるテーマに出会うことができました。僕が大学も卒業せずに会社を始めるようになったのは、甲陽のせいです。高

校入学早々高三の数学の教科書まで持たされ、先生方は大学の触りの授業をされていたように思います。それで僕は数学が嫌いになったのです。ところが中島博先生がされた、夏休みのコンピュータ講習会に参加して、興味をもち、難しい本を貸していただいたりするうちにコンピュータが好きになりました。僕が会社を始める最大の動機は高校一年の夏にあったのです。自分の専門に出会える教育を甲陽で得たと思います。

甲陽のいいところは、高い教育なのに中学と高校のキャンパスが違うところなんです。自由な高校としっかり勉強を教える中学、これからも守り続けてほしいところです。

チャンスはあらゆることろにありまう。苦しいことを続けるのではなく、いつも楽しいと思つて小さなチャンスを求め積み上げていけば、十年二十年で大きなものになります。それを先輩に言いたいと思います。

シンボジウムでは、河内厚郎氏の司会で、およそ①甲陽在学中の思い出、②二十一世紀の甲陽に期待すること、③後輩への一言、という形で討論が進められました。ここでは、紙面の制約により、各パネリストの発言を討論形式ではない形に再構成いたしました。

なお、記念講演とシンボジウムの模様は十月二十日付の産経新聞に掲載されました。本紙面編集にあたり同紙記事を参照させていただきました。

甲陽のいいところは、高い教育なのに中学と高校のキャンパスが違うところなんです。自由な高校としっかり勉強を教える中学、これからも守り続けてほしいところです。

アスキー社長 西 和彦(55回)

僕は高校から甲陽に入学しましたが、高校の早い時期に人生を決定づけるテーマに出会うことができました。僕が大学も卒業せずに会社を始めるようになったのは、甲陽のせいです。高

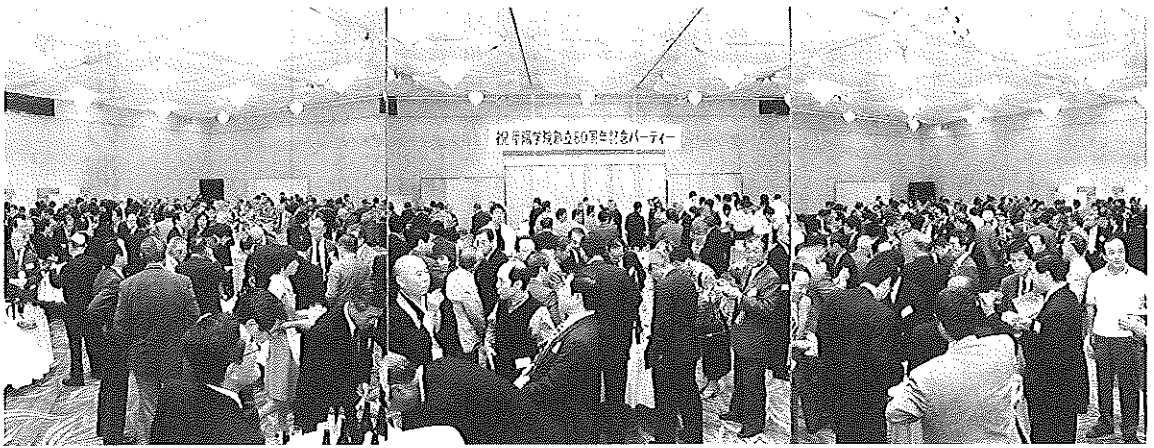
校入学早々高三の数学の教科書まで持たされ、先生方は大学の触りの授業をされていたように思います。それで僕は数学が嫌いになったのです。ところが中島博先生がされた、夏休みのコンピュータ講習会に参加して、興味をもち、難しい本を貸していただいたりするうちにコンピュータが好きになりました。僕が会社を始める最大の動機は高校一年の夏にあったのです。自分の専門に出会える教育を甲陽で得たと思います。

甲陽のいいところは、高い教育なのに中学と高校のキャンパスが違うところなんです。自由な高校としっかり勉強を教える中学、これからも守り続けてほしいところです。

チャンスはあらゆることろにありまう。苦しいことを続けるのではなく、いつも楽しいと思つて小さなチャンスを求め積み上げていけば、十年二十年で大きなものになります。それを先輩に言いたいと思います。

創立80周年記念会員総会収支報告

(収入)		
総予	参加費	4,977,500円
	算	500,000円
	計	5,477,500円
(支出)		
甲子園都ホテル		4,367,043円
記念手袋代		139,125円
楽器運搬費		45,441円
楽師御礼		500,000円
講師お車代		120,000円
パネラー会費		
バネラー会費		
印刷		26,250円
	計	5,197,859円
差引		279,641円



1	1 : パーティーの様子	
2	3	2 : シンポジウム
		3 : 花房教授記念講演
		4 : 辰馬章夫社長のご発声
4	5	5 : 元応援団員によるエール

80周年記念同窓会会員名簿刊行
 (送料込5,000円)

ご希望の方は、葉書または電話で同窓会事務局までお申し込み下さい。代金振替用紙をお送りいたします。ご入金を確認した後に名簿を発送いたします。

小河前校長 御逝去



かねてよりご静養中であつた母校前校長、小河清麿先生が、昨年十月二日早朝お亡くなりになりました。享年七十四歳。

先生は、昭和二十三年のご赴任以来、平成六年に退職されるまで四十六年の永きにわたり母校の発展にご尽力されました。とりわけ昭和四十八年からの二十一年間は学校長として生徒・教職員のご指導にあたられました。

先生のご遺徳を偲び、告別式における中村現校長の弔辞、ならびに教職員・同窓生からの追悼文を掲載いたしました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

弔辞

甲陽学院高等学校中学校校長

中村 泰 二

謹んで、前甲陽学院中学校・高等学校校長、故小河清麿先生のご永眠を悼み、ご靈前に哀悼の辞を申し上げます。

先生の突然の訃報に接し、私どもは深い悲しみでなすすべもなく、道しるべを失つたような状態です。

先生は、一九七三年四月以降校長として、ご活躍なさいました。先生はお言葉のなかで常に「甲陽学院は、型にはまった教育はしない。生徒諸君には十分自由が与えられている。しかしこれには規律を前提としたものであることをしっかりわきままえ、毎日の生活のリズムを持つて欲しい。そして自主的な行動ができる人間になってほしい。友人を作り、互いに良いところを学び合う中で、自分を磨き、自分を作つてくれることを期待している。」と述べられ、イトトン校やハロー校のような学校にしたいという夢を持っていらつしました。

我々や生徒達に語りかける口調には気品があり、常に「濃厚」の二字が先生のお姿でした。あまり表現をなさらないときも、常に奥深いものを感じさせてくださいました。

一九四九年五月には、第一回創立記念音楽会を甲子園の校舎の大講堂で企画され、広く豊かな人間性に基づく人材を育てるためには、その情操の面として、音楽で可能な限り一流のものを身近に触れる機会を作るというお考えをもち、自らプログラムを作成されました。数学と音楽という広い視野のなかに豊かな心をお持ちでした。来年は創立音楽会も第五十回となり、先生と共に盛大な創立音楽会を企画したいと思つておりました。

先生との思い出は述べつくせません。ある日の思い出があります。何かの会合の掃りの車の中で「先生も腹の立つ様なことがありますか」とお聞きしたときに「それはあるよ、やはり腹の立つことは。」と言われました。あのときのお顔が今も思い出されます。その時私は、先生から濃厚の中に秘められた「忍耐」という言葉を学ぶことができました。

常に無言の教えがありました。まだまだこれからお教えいたいただきたいと願つておりました。

さて、私たちはいまの悲しみの深さのまま、いつまでも悲しみに打ちのめされていることでしょうか。しかし、それでは先生のご遺志に背くこととなります。先生が退職なさる時、「甲陽学院生に、ボランティア精神を養成したい。」とおっしゃったお言葉、あのお言葉の実現に努力したいと思つております。

どうか先生、天国で白鹿の酒を、心ゆくまで飲んでください。先生のご冥福を心からお祈りします。

小河清麿先生、さようなら。

安らかに、清磨先生

甲陽学院高等学校教諭

田村 眞也 (36回)

昭和二十四(一九四九)

年四月、甲陽学院中学校に入学を許可された私たち36回生は、A組高井先生、B組池上先生、C組小河清磨先生の三人の担任に迎えられました。当時はクラス替えがなく、私は小河清磨先生の下で、同一の級友たちと三年間を過ごしました。清磨先生は鷹揚で、品格があり、私たちを厳しく叱りつけることもなく、毎日こやかな顔つきで朝礼に出て来られ、ゆつたりとした数学の授業をされ、春風に漂う白雲の如くのおんびりとした一日が過ぎて行きました。清磨先生はクラシック音楽に造詣が深く、ご存じのように、ご自身でヴァイオリンとヴィオラを演奏され、また合唱団にも所属されておりました。またフランス語に傾倒されていたようで、例えば、一般の呼称であるチエロといふ楽器も宮沢賢治なみに、セロと呼ばれておりました。

昭和二十六(一九五二)年、清磨先生に個人的に大変ご面倒をおかけする出来事が、私の身に起こりました。父が、胃潰瘍(痛ではなかったかと思ひます)の宣告を受けて入院しました。手術をするには体力が弱っているというので輸血を受けたところ、血液が合わず

に、拒否反応が起こり、入院して十日の八月三日、あの世へ旅立ちました。思いもかけない出来事でした。中学三年の私が受けた精神的打撃、人の世のはかなさを嘆く心情、死を恐れ深く考え込む姿を見て、心配になった母が清磨先生に相談した結果、ヴァイオリンを指導して頂くこととなりました。決して厳しい特訓というものではなく、お互いの都合の良い日に、放課後中学校の講堂で一对一の練習が始まりました。竹村正(現兵庫医大教授)氏が練習に加わり、二人で励まし合いながら練習を続けました。翌年、高一になると(清磨先生は中学に残られました)先生は中学にいらなくなったが、ヴァイオリンの練習を希望したり、フルリンの練習を希望したり、フルリンやクラリネットを吹きたいと望む同級生が十名以上も現れまして、小さな合奏団が結成されました。そして清磨先生に顧問をお願いするとともに合奏団の名称を考えて頂いた結果、「アンサンブル部」が誕生しました。中学から足を運んで頂いて、清磨先生に棒を振って頂いた思い出の中で、一番印象に残っているのは、大阪の中之島公会堂での演奏でした。チャイコフスキー作曲のバレエ音楽、ビゼー作曲の「アルルの女組曲」、ヴェルディ作曲の「カルメーン組曲」等、大きな交響曲

とまではいきませんが、十数名で演奏できる小曲をアンサンブル部用に各パート別に編曲して下さいました。その後、完全にクラシック音楽の魅力にとりつかれてしまった私は、京大で交響楽団にのめり込んでしまいました。留年を続ける姿を見て「あなたにはヴァイオリンを教えたことは間違っていたのでは」と、清磨先生が嘆かれたことがあります。私にとってもありません。私にとってクラシック音楽との結びつきは、掛け替えのない経験であり、我が青春時代の最も輝ける一大エピソードであったことは間違いないと思います。その後、大学卒業後も北海道の最果ての地と言っても過言ではないオホーツク沿岸の興部高校から呼び戻され、母校で教鞭をとることが出来るようにして頂きました。甲陽に勤務してからの清磨先生との交流や、合衆国セントジョージズスクールと姉妹校提携のため二人でアメリカへ旅した時の話等、まだまだ数多くの思い出が残っていますが、紙面の都合上、これで終わらせて頂きます。清磨先生から授かりました音楽との結びつき、広い心の持ち様、何を省みずも全て私の胸の中に深く強く刻み込まれた贈り物であったことを、心から感謝申し上げます。安らかなご永眠を。

清磨さんとのこと
—敬愛の念をこめて—
近藤 健(49回)

一九六六(昭和四十二)

年夏、阪神間の私立高校の集まりである「親善音楽会」終了後、器楽のみの演奏会の話が持ち上がりました。渾ブラスバンド部の山本先生、親和器楽班の沢先先生、並びに甲陽アンサンブル部及び小河先生、以上三先生のご尽力により、翌年春の「第一回音楽の集い」開催が決まり、秋からの練習が開始されました。当時のアンサンブル部は、現在「ストローおじさん」として多忙を極める神谷徹(大阪音楽大学講師)をはじめ、多数の優れた部員がいたに

もかわならず、私他数名の劣等生に足を引く張られバンドとしてのレベルは低レベルでも難しい部分は吹いてなかつたり(私の事です)、金管の音が度々ひっくりかえり散々の出来。ついに濃厚な指揮者の清磨さんも「そのホルンやめて、チェロで行きましょう」といわれ、急速清磨さんのチェロをお借りして三本に増やしたりする始末、それでも根気強く決して怒る事なく品よく指導して下さいました。今から考えると感謝というよりも、清磨さんとの音楽レベルの違いを思い出し恥ずかしい限りです。それから八年後、ずうず

うらしくも仲人をお願いに上りました。(家内は当時の親和器楽班員)最初は固辞されましたが、「奥様は留め袖でなく洋装で出席」という条件付きで、引き受けていただきました。式後ご挨拶に伺った所、北野クラブで「食事とダンス」といふことになり、その時のごわごわいただいたエスカルゴの味と御夫妻のワルツ・ルンバ・ジルバの華麗なステップが忘れられません。仲人お引き受けの条件といい、御夫妻のお洒落さに驚かされました。

殺伐とした現在の日本、清磨さんの身につけられていた「上品さ」の重要性を改めて考えています。合掌

川村 俊郎(46回)

小河先生が亡くなられた。

その知らせを聞いたとき、なにかしら心の中に大きな穴が空いたような気がした。中高の六年間数学を教えて頂いた先生の死というより、私の青春を広く大きく育み、バランス感覚の重要性を指導して頂いた、「人生の先達」との永久の別れという感じを強く抱いたからに他ならない。私は特別よい生徒でもなかつたが、先生に叱られたことはどうしても思い出すことができない。声を荒げられることもなかつたように記憶している。今でも思い出すのは、高校時代の

の教室での次のような場面である。

授業中の自習時間、川西宏君と近藤宏君の三人でトランプに興じていた。それも先生に隠れてではなく、わざと見つかるように通路をはさんでカードを交わしていた。先生は我々三人の顔をみて、実に穏やかに、「ははトランプですか」と行つて静かに通り過ぎて行かれた。厳しい叱責の場面を半ば予想していた我々は全く意表をふつた。「はあ」という間のぬけた返事しかできなかった。

先生が満開の夙川沿いの道をダブルのスーツに襟ネクタイという姿でゆつくりと歩かれる先生の姿が、昨日のことのように思いだされる。この文章も先生に提出する最後の答案になつてしまつた。きつと良い評価はもらえないかもしれない。しかし評価の良し悪しではなく、永遠に先生の御指導の無い事が悲しい。

先生どうか安らかにお眠り下さい。ありがとうございます。合掌